

学生の学びと活動を止めない大学の取り組み

(1) 留学・グローバル教育への対応

上智大学

世界中で人の移動が制限される
未曾有の事態への対応

上智大学が全ての海外留学の中止を発表したのは、2020年3月中旬のこと。グローバル化推進担当副学長の杉村氏は「先々の状況が見えない中で今日・明日で決断しないといけないことの連続だった」と当時を振り返る。



グローバル化推進
担当副学長
杉村美紀氏



グローバル教育推進
室長
佐藤和美氏

「1月下旬頃から対応の検討を始め、2月初旬には中国への渡航禁止を、3月頭には国外に滞在する学生全員に帰国を呼びかけました。そして、3月中旬に20年度春学期の海外留学中止を周知。当然『渡航したばかりで帰りたくない』と訴える学生もいて、グローバル教育推進室の職員は受け入れ・送り出しに関わるオペレーションだけでなく、個々の学生に対するフォローも求められ、だいぶ苦勞をかけたと思います」。

室長として一連の対応を牽引した佐藤氏は「呼び戻した学生のフォローには特に気を配った」と振り返る。

「履修途中の科目の単位の扱いをどうするか、日本からオンラインで受講するのか・できるのか等、学生の希望を聞き取りながら交換先と連絡をとり、可能な道を探りました」。

結果、交換先の方針と本人の希望が合致し、現在も日本からオンラインで交換先の授業を受けている学生もいれば、対面のみ、あるいはオンラインだが留学生は受け入れないという決定がなされたために上智大学に復学した学生もいる。また、外国人留学生の受け入れに関しては、春学期からオン

ラインでの受け入れ態勢を整えたという。

「正規の外国人留学生については、春学期から本学の授業がオンラインで実施されたため、新入生・在生ともに、日本への入国が叶わない学生でも、自国から本学での授業を履修しました。交換留学生については、春学期は、前学期から留学中の留学生約100名が、日本に留まりながら本学での留学を継続し、オンラインで授業を履修しました。秋学期は、新たに本学への交換留学を希望していた学生のうち、オンライン留学を希望した学生約20名が、それぞれの国からオンラインで本学の授業を履修しました」。

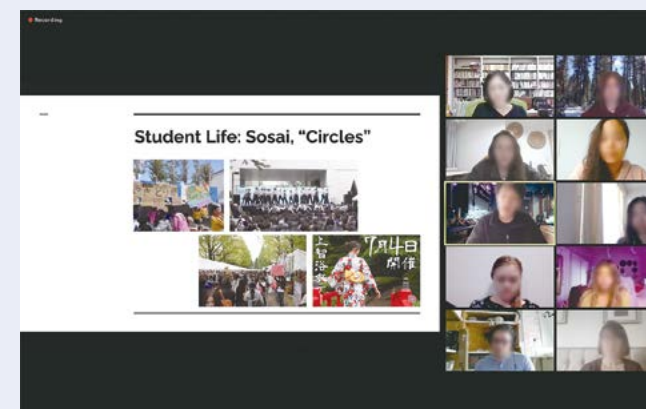
国際交流の新たな可能性を見いだせた「COIL」

渡航が不可能になった中、上智大学が推し進めたのが「COIL」(Collaborative Online International Learning/国際協働オンライン学習)、即ち、ICTを活用したオンラインによる協働学習と国際交流を取り入れた教育手法だ。上智大学は、文部科学省の「大学の世界展開力強化事業」において、お茶の水女子大学、静岡県立大学と3大学合同の構想「人間の安全保障と多文化共生に係る課題発見型国際協働オンライン学習プログラムの開発」の採択を2018年に受け、米国10大学とも連携してCOILを進めていた。

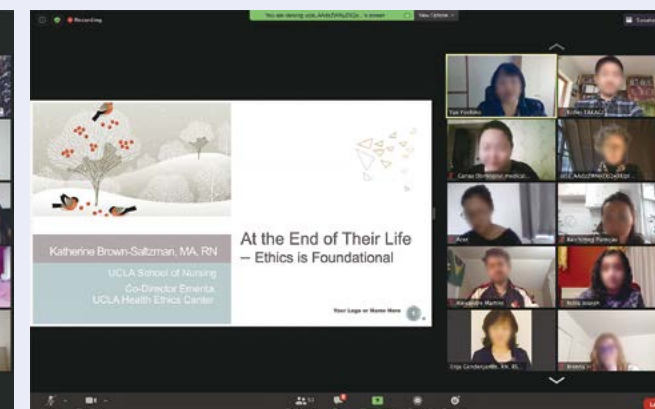
「特にカリキュラム上留学期間をとりづらい看護学科で力を入れており、本学と静岡県立大、アメリカ、モンゴルの大学を結んで国際保健・看護関連の授業を行う等していました。それが、20年春学期の授業のオンライン実施のために全学でZoomを契約したことで、他学部や他科目でも一気に進んだのです」と杉村氏は話す。米国10大学以外とのCOIL授業も増えていき、今年度行われたCOIL型授業は、総合グローバル学科や環境系の科目、美術史、日本研究、教育学等で20を超える。参加学生は21年1月時点でのべ1100名に上っているという。

「COILの場合、日本の教室にしながら海外の学生と協働

年間300～400人の学生を交換留学に送り出し、600人近い外国人交換留学生を受け入れてきた上智大学。コロナ禍において留学の送り出し・受け入れを止めざるを得なくなった中、いかにしてグローバル教育を継続していったのか？ グローバル化推進担当副学長の杉村美紀氏、グローバル教育推進室長の佐藤和美氏に伺った。



COIL型授業の様子。米国モンタナ大学の学生と協働学習を行った。



看護学科「国際協力方法論」でのCOIL型授業の様子。米国、モンゴルの看護学部と接続した特別講義。

して学ぶことができ、かつ、双方の担当教員も一緒に授業運営を行うので、学生個人ではうまく解釈できないことも教員が気づきを与えてくれます。それが特に専門科目を学ぶうえで有効で、留学の代わりでもなく補完でもない、新たな可能性を感じています」(杉村氏)。

COIL型授業・プログラムの一層の充実を図る

留学再開の目処が立たない中、杉村氏は「COILを取り入れた教育の一層の充実をはかりたい」と話す。

「授業と授業をつなぐCOILが教育手法として重視される流れは、コロナが収まっても変わらないと見ています。その流れにいち早く乗り、教育の質を保ったプログラムやコンテンツを作るよう、連携先の大学と協働学習のあり方を模索していきます。まだ最適解は見いだせていませんが、留学とCOILを切れ目なく接続させられるようなこともやっていきたいですね」。

一方、佐藤氏は、留学生を送り出す部門として事前教育のアップデートに取り組む。

「学生を送り出す際に私達が最も重視するのは『安全』です。そのため、これまでは犯罪やテロから身を守るよう事前教育を行ってきましたが、どこかに感染症に関する内容も

加えていきます。また、今後、渡航が可能な状況となり留学プログラムが再開すれば、留学を強く希望していた学生が一斉に動き出すので、その意欲や流れを止めずにスムーズに送り出せるよう工夫していきたいですね」。

現地に行かずとも、現地の学生と協働学習できるCOIL。上智大学での今後の展開に期待したい。(文/浅田夕香)

学生の声

● COILは留学せずに海外の大学の教授のレクチャーを受けることができるのが魅力です。海外の先生からの視点で語られる問題と、日本にいる私達の視点から考える問題に違いがあること、または同じ問題を抱えていることへの、気づきを与えてくれる環境も、COILの魅力だと思います。(看護学科「国際協力方法論」参加学生)

● 新型コロナウイルスの感染拡大で日本の大学生の学びの機会が阻害されているが、一方でオンライン学習という機会があり、今回もZoomを活用することによって日本にいながらサンフランシスコ大学の教授に会うことができた。このような画期的な方法で学びの機会を与えてくれた先生方に感謝したい。(博士前期課程グローバル・スタディーズ研究科「東南アジア宗教文化研究1(サンフランシスコ大学アシュトン教授による特別講義)」参加学生)